

韓国伝統庭園「別墅」^{べっしょ}の GIS を用いた領域分析と

空間構成に関する研究-アジア庭園基礎研究-

千葉大学大学院環境園芸学専攻 博士前期課程 2 年 (助成時)
博士後期課程 3 年/特別研究員(DC2) (現在)

金 睿麟

1. 背景と目的

本研究は、韓国湖南地方の別墅を対象とし、別墅の周辺山稜地形がつくりだす別墅の圍繞性について明らかにすることを目的とする。

別墅は、庭園の境界に塀を作らず、周辺の自然景観を庭園の一部として積極的に取り入れ、それを別墅の領域とする(図 1)。多くの別墅が囲いを持たない空間構成であるため、別墅の物理的領域は定かでない。別墅の保全を考える上で、具体的な外園の空間構造や領域を把握することは重要である。そこで本研究は、外園の中でも近中景の周辺環境が、塀や垣を持たない開放型の別墅の領域を規定し、圍繞性を形成していると考え、その特徴を定量的に把握することを目的とする。別墅を取り巻く前後方の地形による空間特徴を確認するとともに、それら周辺地形により別墅がどのように圍繞性を獲得し、かつその領域性はどの程度の範囲であるかを考察する。

2. 研究対象および方法

本研究は、朝鮮時代に造営された湖南地方の全羅南道に現存する別墅のうち、造営当時から移転せず保全状況が良好な、20 カ所を対象とする。塀がない別墅の圍繞性をつくる環境要素は別墅の周辺地形にあると考え、別墅の外園にあたる可視領域のうち、周辺山稜部に着目する。研究方法は、1)現地調査と 2)GIS 分析に分けて進める。GIS 分析では、別墅の視点場である別墅建築の位置を GIS にプロットし、GIS による別墅からの可視領域分析を行い、別墅を囲う山稜部の特徴を確認する。

3. 研究結果および考察

湖南地方全羅南道に分布する別墅は、敷地を取り巻く周辺地形の特徴をいかした空間構成をもち、圍繞性および領域性を獲得していると考えられる。

別墅は、眺望される領域の分布と周辺山稜部地形の形態に前方と後方で特徴的な差が認められる。前方の場合、近中景にあたる 3km 範囲内

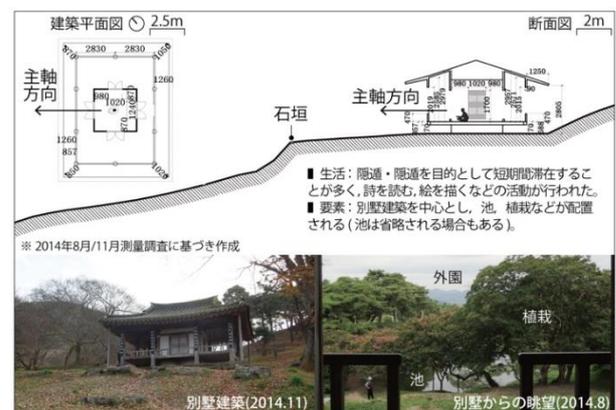


図 1 別墅庭園の概要および対象地の例(鳴玉軒)

で可視領域が広がるのが20カ所のうち、15カ所と一番多く、残り5カ所の場合、遠景の3km以上に広がり領域性をもつことが特徴的である。また、別墅の前方では、第一山稜部までの距離によって空間構造に相違点が認められる。第一山稜部までの距離が約0.5km程度の「近景型山稜部」の場合、別墅前方の平野部の割合が小さく、第一山稜部までの距離が約1km以上離れている「中景型山稜部」は、別墅から第一山稜部までの1km圏内は、平野部の割合が高い。山稜部までの距離に関わらず、多くの別墅の平野部には農耕地と河川が主に分布し、その背後に山稜部が現れる。一方、後方の場合、約0.5-1km圏内で可視領域が収まる傾向が強く、前方に比べその領域は狭い。また、別墅の近くに山稜地形が迫っており、後方山稜部の地形の方位は、別墅建築の主軸方向と同じ向きをもつ特徴がある。

以上の特徴から、この地方の多くの別墅は「後方の山稜部-別墅-平野部-第一山稜部」の空間構造をもつと考察する。「近景型山稜部」の場合、いずれも前方山稜部が1km圏内に迫っているが、5カ所のうち、3カ所が後方の山稜部を有し、残り2カ所の場合、背後の山稜部がない空間構造をもつ。また、全体の半分にあたる、「中景型山稜部」の場合、別墅の後方は、10カ所全体において必ず背後に山を背負う「後方の山稜部-別墅」の空間構造をもち、前方景の平野部には、主に農耕地、河川が分布する。最後に遠景をもつ別墅の場合、5カ所のうち、4カ所が背後に山稜部を構える構造をもつ。このことから、別墅は、後方の山稜部と前方の山稜部群により空間構造を形成し、特に「中景型山稜部」のように、前方景には、河川や農耕地の平野部と山稜部が3km圏内に広がり、後方景に山稜部が迫る空間構造が最も多く見られる形式である。

以上の別墅の周辺山稜地形の特徴は、別墅が囲繞性を獲得するのに有効な空間構造であると考察する。別墅の前方の近中景において山稜部が点在し、視覚的囲いをつくり、後方においては別墅の主軸方向と同方位をもつ地形が迫ることで別墅を囲い込む効果をもつ。特に別墅の前方景に点在する山稜部は必ずしも概念図のような左右対称ではなく、左右のばらつきあるように点在する傾向が認められる。これは別墅を視覚的に囲い込むにあたり、敷地周辺の山稜地形が連続的な尾根線で遮蔽するのではなく、別墅から眺望可能な点在する山稜地形を重ね合わせつつ、前方の左右においても囲繞性をつくっていたと考察する。

4. まとめ

本研究は、別墅の囲繞性を明らかにするため、周辺山稜部に着目し、GISによる定量的分析を行ったものである。別墅の研究は、これまで概念図としてしか把握されておらず、実空間に結びついていないものが多く、別墅の領域を定量的に扱うことやタイプ分類を通じた地域の特徴まで述べたものはほとんどみられない。本研究は、定量的かつ空間論的に別墅を解明することで、今後の別墅の形態論研究の基礎資料となることを期待する。最後に、本研究は別墅周辺山稜部の地形について定量的な分析は行なったが、その景観特徴までは考察できていない。眺望を重視する別墅の外園領域における景観特徴については今後の課題としたい。